

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 3 日現在

機関番号：32612

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770114

研究課題名(和文)ラテン語宗教テキスト Stimulus Amoris (c. 1300) の校訂

研究課題名(英文)Editing the Latin Devotional Text "Stimulus Amoris" (c. 1300)

研究代表者

井口 篤 (IGUCHI, Atsushi)

慶應義塾大学・文学部・准教授

研究者番号：80647983

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、1300年頃書かれたラテン語宗教作品『愛の疼き』を校訂することであった。中英語の翻訳作品と比較する際の基本テキストを得るためである。このために、14世紀の終わり頃にイングランドで流通していた7つのラテン語写本を比較してきた。

イングランドで行った二度の調査旅行により、多くのデータを得ることができた。しかし、ラテン語写本と中英語翻訳を詳細に比較するうちに、中英語翻訳は7つのラテン語写本のどれからも翻訳されなかったかもしれない可能性が出現した。

このため、本研究は成功したとは言いが、これまでの調査により、大陸ヨーロッパで書かれたラテン語写本にも目を向ける必要性が明らかになった。

研究成果の概要(英文)：In this project I have been aiming to edit the Latin devotional text "Stimulus Amoris" written in around 1300, for the sake of obtaining a base text with which to compare the Middle English translation. In order to achieve this, I have been collating seven Latin manuscripts that were circulating in England towards the end of the fourteenth century.

Two research trips to England enabled me to accumulate a vast amount of data. However, as I continued to closely collate the Latin Manuscripts with the ME version, there gradually emerged the possibility that the ME text might not have been translated from any of the seven possible Latin sources that I proposed at the outset of this project.

Therefore, this project has not been wholly successful. However, the research conducted up to this point has at least shown me a path to take in the future: that I broaden the geographical limit to this study, and look extensively at those Latin manuscripts written in Continental Europe.

研究分野：中世イングランドにおけるラテン語宗教テキストの英語への翻訳

キーワード：ラテン語宗教文学 母語翻訳

1. 研究開始当初の背景

中世後期ヨーロッパにおいて幅広い読者層を獲得していたラテン語宗教作品に、*Stimulus Amoris* (1300年頃)がある。このキリストの受難を扱った瞑想の書には、実に500以上のラテン語写本が現存しており、中世後期のヨーロッパにおける宗教文化を形作る上で重要な役割を担っていたと考えられる。

しかし問題は、この *Stimulus Amoris* には信頼に足る20世紀以降に編纂された校訂版が存在しないことである。*Stimulus Amoris* は14世紀の終わりから15世紀にかけて英語を含めたヨーロッパ各地域の俗語に翻訳されており、当時ラテン語で書かれた宗教作品がどのように俗語読者たちに受容されたのかを考える上でも、非常に重要なテキストである。しかし、中英語翻訳と比較する際には、現在でも A. C. Peltier が19世紀後半に編纂したテキストが使われているのが現状である。この Peltier のテキストは、16世紀のヴァチカン写本に基づいて編纂されているため、14世紀後半に作成された中英語翻訳との比較に使うことはできない。

ラテン語原典と中英語翻訳の比較を行うためには、まずラテン語原典の厳密な校訂版を作成することが必要であると思いついた。

2. 研究の目的

ラテン語の *Stimulus Amoris* と中英語翻訳 *The Prickyng of Love* を比較するための基礎として、*Stimulus Amoris* の校訂版を作成することが本研究の目的である。そのことにより、将来的にはこのラテン語原典が中世後期イングランドにおいて俗語読者層にどのように受容されたかについて明らかにし、そして中世後期イングランドの俗語宗教文化をより深く理解することに寄与することを目指している。

3. 研究の方法

中英語翻訳である *The Prickyng of Love* が翻訳されたのは、最も早くても1380年頃であるから、まず14世紀後半にイングランドにおいて流通していたラテン語写本を特定する。そのような写本は7つある。

(1) London, British Library, MS Royal 7. A. 1

(2) London, British Library, MS Royal 8. B. 8

(3) Cambridge, Corpus Christi College, MS 137

(4) Cambridge, Corpus Christi College, MS 252

(5) Cambridge, Trinity College, MS B. 14. 7

(6) Oxford, Bodleian Library, MS Digby 58

(7) Oxford, Corpus Christi College, Cod. 240.

これらの7写本を比較し、どのラテン語写本が最も中英語翻訳に近いのかを決定した上で、最終的なラテン語テキストの底本とする予定であった。

4. 研究成果

研究の当初、特に2013年度においては、デジタル化されている二つの写本、Cambridge, Corpus Christi College, MS 137 及び Cambridge, Corpus Christi College, MS 252 を仮の底本として参照し、中英語翻訳と比較する作業を続けていった。ところが、この二つの写本が中英語翻訳の原典でないことがかなり早い段階で分かってしまった。例えば、中英語翻訳において

and for dissertis **of seynt fraunceys and** of alle seyntis (Kane, I, 13/21-21)

とある部分のラテン語は、MS 137 と MS 252 においては、

atque **benedicti** et omnium sanctorum merita (CCCC 252, f. 2v; CCCC 137, f. 94r)

となっており、翻訳者が何も無いところから 'of seynt fraunceys' (「聖フランチェスコの」) を付け加えることはおそらく可能性としては低いであろうから、MS 137 と MS 252 は中英語翻訳の原典だったことは考えにくい。

2014年度と2015年度においては、イングランドの図書館(大英図書館、ケンブリッジ大学図書館、ケンブリッジ大学トリニティ・コレッジ図書館、オックスフォード大学ボドリーアン図書館、オックスフォード大学コーパス・クリスティ・コレッジ図書館)での調査を2度行った。ところが、参照する写本の数が多く、また稀覯本と分類されているために写真撮影が許可されおらず、図書館でしか参照できないものもあるため(写本(2))、2度の渡英調査では十分な調査ができたとは言い難く、最終的に *Stimulus Amoris* の校訂版を作成するまでには至らなかった。しかし、これまでにを行った比較研

究によって、イングランドにおいて流通していたラテン語写本のいずれも実は中英語写本の原典ではないのかもしれない、という可能性も浮かび上がってきた。というのも、ラテン語写本と ME 翻訳を詳細に比較すると、様々な矛盾する結果が出てくるからである。以下、幾つかの場合に分けて研究結果を紹介したい。

[1] 中英語翻訳者が曖昧もしくは難解と思われる箇所を翻訳していない場合

今回写本間の比較作業を進める中で大きな問題として浮上してきたのが、中英語翻訳はかなり意識している箇所が多く、その場合、どの写本から翻訳しているかを推測することはほぼ不可能だということである。このため、当然のことながらある程度ラテン語原典が逐語訳されている箇所を参照することになるのだが、中英語翻訳者はしばしば大胆な意識を行っている。例えば、ペルティエには次のような箇所がある。

O stulti et tardi corde, qui ad possidendum aliquod vanum per **incerta** foramina introitis (Peltier, 634b/50-635a/1)

この文の 'per incerta foramina' (不確かな穴を通じて) における 'incerta' (不確かな) に対応する箇所は、イングランド写本の中には 'incepta' (始められた [CCCC 252; CCCC137]) もしくは 'inepta' (無益な [Royal 7. A. i]) としているものがあり、テキスト間で一定しないし、いずれも文脈中であまり意味をなさない。翻訳者に取っても不明であったためか、この部分は *Prickyng* においては訳出されていない。

A 3e dull and slow in herte that **throu3 vicious vsyng of 3owre bodily wittes** goon in-to likynges of al worldly vanite (Kane, I, 12/9-11)

[2] 中英語翻訳がイングランド起源のラテン語写本よりもむしろペルティエのエディションに近い場合

ペルティエのエディションの方が、それより早い時期に作成されたイングランド起源の写本よりも中英語翻訳に近いと思われる箇所がある。例えば、中英語翻訳において

Loo how the tresour of wisdom and of endless **charite** is opened (Kane, I, 12/2-3)
(見よ、知恵と尽きることのない愛の宝物庫が開けられる様を。)

となっている箇所のラテン語は、各写本では以下のようになっている。

Ecce apertus est thesaurus diuine sapientie et **ciuitatis** eterne. (CCCC 252, f. 2r, CCCC 137, f. 93vb)

Ecco apertus set thesaurus diuine sapiente et **ciuitatis** eterne. (CT B. 14. 7, f. 21v)

Ecce apertus set thesaurus diuine sapientie et **suauitatis** eterne. Intra ergo per vulnerum aperturam et cum cognicione delicias optinebis. (Royal 7. A. i, f. 111v)

Ecce apertus est thesaurus diuine sapientie et **ciuitatis** eterne (Royal 8. B. VIII, f. 5r)

どの写本においても、翻訳語の「愛」(charite) に対応するべきラテン語の単語 'charitatis' が見られず、その代わりに 'ciuitatis' ('国') や 'suauitatis' ('甘美さ') などが見られる。

なんと、作成年代が新しすぎるとの理由で、研究の当初で「中英語翻訳の原典にはなりえない」と断定した Peltier のテキストにのみ、次のように 'charitatis' が見られる。

Ecce apertus est thesaurus diuinae sapientiae, et **charitatis** aeternae. (Peltier, 634b/42-43)

[3] イングランド写本の間で差異がある場合

イングランド写本の中には、ペルティエと一致するものと一致しないものがある場合がある。

thou may thenn make 3if thow wolt a good sharpe schourge myche paynande. and **not** mykel **hertande** (Kane, I, 16, 1-3)

は、ペルティエでは

Facias tibi unum bonum flagellum multum afflictivum, et **non** nimis **laesivum**. (Peltier, 636a/15-16)

となっている。'not mykel hertande' は、'non nimis laesivum' を直接翻訳したものと考えられるので、ME 翻訳者の眼前にはこのラテン語に近い原文があったことが推定できるが、この部分はイングランド写本の間では差異が見受けられる。ラテン語テキスト

の写字生たちにとっておそらく難しかったのは、'non nimis laesivum' の部分であると思われる。というのも、この箇所は、CCCC 252 と CCCC 137 では 'nimius laxiuum' となっている。ME 翻訳者とペルティエとほぼ同じ読みを提供するのは、Royal 7. A. i などである。

facias tibia unum bonus flagellum
multum afflictum et **non** nimis
lesivum (Royal 7. A. i, f. 112r)

[4] 中英語翻訳がペルティエのエディションよりもイングランド起源のラテン語写本に近い場合

しかしまた、稀にはあるが、すべてのイングランド写本がペルティエよりも ME 翻訳に近い場合がある。ME 翻訳の

that i may onli loue the **and ay**
brenne in thi loue ay coueyte thi
worshepe (Kane, I, 13/23-24)

とペルティエのテキストにおいて対応する箇所は、

ut te solum diligam, tuo amore
semper sitiam (Peltier, 635a/48-49)

であるが、よく見ると、'and ay brenne in this loue' に相当する箇所がペルティエにはない。そこでイングランド写本を見てみると、調査者が今回参照したいずれの写本においても、

ut te solum diligam. **tuo amore**
semper ferueam. tuum honorem
semper siciam. (Royal 7. A. i, f.
112r)

となっており、'ay brenne in this loue' に当たるラテン語が確認できる。

このようにイングランド写本が ME 翻訳と一致する箇所をもう一つ挙げておきたい。

that **no thyng like me but thow.**
and nothyng make me sori but
synne (Kane, I, 14/1-2)

ペルティエにおいてはこの箇所は

nihil me contristet nisi culpa.
(Peltier, 635b/3)

となっているが、このラテン語は中英語の 'no thyng like me but thow' の部分を含んでいない。ここは、調査者が参照したイングランド写本すべてにおいて

nichil me afficiat nisi tu nichil me
constristet nisi culpa

となっており、やはりペルティエのテキストに基づいている写本も *Prickyng* の原典たり得ないことがわかる。

以上簡単に紹介したように、*Stimulus Amoris* のラテン語写本とその中英語翻訳との比較から浮かび上がってくるのは、非常に複雑な対応関係であり、本研究の当初想定していたように、14 世紀終わりにイングランドで流通していたラテン語写本が中英語翻訳の原典では必ずしもなかった可能性がある。

このため、中英語翻訳の原典がヨーロッパ大陸に流通していた写本から翻訳された可能性を見据え、今後は大陸ヨーロッパ諸国に現存するラテン語写本も調査していく必要があると考えている。また、ペルティエのエディションが底本としていた初期印刷本の伝統についても、ぜひ調査する必要があるであろう。

そして究極的には、この原典を確定させようとする本研究の持つ意義についても考えなくてはならないであろう。今回ラテン語写本の比較を実際にして再確認したことは、基本的に逐語訳をしているかと思えば、突如大胆な意識を試みる中世の翻訳テキストを研究するにあたっては、「原典」と「翻訳」との正確な対応・照応関係を確立することが非常に難しいということである。このことは、中世におけるテキストの伝播の研究において、一直線の系譜学を描こうとすることが無益であることを物語っているのではないだろうか。中世テキストの翻訳研究においては、一対一の単純な影響関係から自由なモデルを構築する必要があるのかもしれない。もしそうであるならば、中世後期ヨーロッパにおける「翻訳」の概念も再考を迫られることになるであろう。今後の研究においては、以上の様な点についても考えていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

井口 篤, 『『心の扉を開ける』—中世後期イングランドの俗語神学—』, 『西洋中世研究』, 第5号(2013), 139-154 [査読あり]

[学会発表](計2件)

井口 篤, 「失われた原典をさがして - *The Prickyng of Love* (c.1380) は

どのラテン語写本から翻訳されたのか?」, 日本中世英語英文学会全国大会, 2014年12月7日(同志社大学[京都市])

井口 篤, 「自由意志と人間 -15世紀俗語神学における救済-」, シンポジウム「15世紀イングランド文学における革新と継承」, 日本中世英語英文学会全国大会, 2013年12月1日(愛知学院大学[愛知県日進市])

〔図書〕(計1件)

宮下志朗, 井口 篤編『ヨーロッパ文学の読み方 - 古典篇』(放送大学教育振興会, 2014), 326頁 [第11章「マージェリー・ケンプの書」pp. 211-227において *Stimulus Amoris* について触れている。]

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井口 篤 (IGUCHI, Atsushi)
慶應義塾大学・文学部・准教授
研究者番号: 80647983

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: